



佳作

書評 アンドレ・ジッド作 山内義雄訳 『狭き門』(新潮社 1987)
(中央新書・文庫コーナー：新潮文庫 シー2-3)

文学研究科 博士前期課程2年 清水勇樹

一般に恋愛は、殊に若い男女間の恋愛は、激しい情熱に基づくものだとされがちだ。しかしこの小説で描かれる、従姉弟同士の禁欲的な恋愛感情は、静謐な情熱をたたえたプラトニック・ラヴの極致と目されるであろう。母の不義を知って以来、現世的な幸福を自らに許さぬアリサと、彼女の苦しみに共鳴し、彼女と共に苦難の道を歩んでこそ天上の世界が開けるのだと信じるジェローム。その二人がチャペルで耳にしたのが、牧師の語った聖書の引用句である。

力を尽くして狭き門より入れ。滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者おおし。生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見いだす者すくなし。

多くの人が現世的で安易な幸福に惑わされるが、人はそうした仮初めの幸福に背を向け、苦しみもがいて本当の幸福にたどり着かねばならない。ジェロームにとってはアリサその人こそが、困難の末に到達すべき天上の至福である。彼はその道のりを次のように夢想している。「わたしは、見つづけている夢のなかで、その門のことを一種の圧延機のように想像して、自分はそのから骨を折ってはいっていくのだ、それは非常な苦しみではあるが、しかしそこには、何か天の祝福の前味といったようなものが見いだされるのだというふうに感じていた。そして、この門は、さらにアリサの部屋の戸口になっていた。わたしはそこへはいるために体を小さくし、また自分のなかに残っているあらゆる利己心というものを捨てるのだ……」

もはや愛することは苦しむことに他ならない。ジェロームはアリサと二人して聖らかな世界に入っていこうと誓うのだが、彼が二人の関係の進展をほのめかすたび、アリサの方は彼から距離を置いてしまう。ジェロームはアリサしか見えないのに、そのアリサは近くほどに逃げてゆく。彼はついに天上の幸福にたどり着くことができない。アリサの方でもジェロームと距離を保ちながら、その一方で彼女が抱いてはいけないはずの現世的幸福、ジェロームがそばに居てくれる幸福を密かに味わっていたりもした。しかしそれが明かされるのは、彼女が人知れずこの世を去ってから見つかった、彼女の日記によってである。肉の幸福を犠牲にして聖らかな世界へ至るはずが、人間の生の要求がさらけ出されてしまう。肅々たる作品世界のなかで起こっているのは、この激越な聖俗の相克なのである。

二人はこの世において結ばれることこそなかったけれども、苦しむほどに純度を増してゆく聖らかなさがある。あたら青春を無駄にして、と嘆く人もいるだろう。しかし私は彼らを笑えない。彼らが求め続けたものに、私も憧れを感じてしまう。報われない努力は美しい、そしてその命題そのものも自分たちで肯定してはならない。狭き門への道行きは二重に厳格だ。そしてその、身を滅ぼすほどの生真面目さが、私にはかえってマゾヒスティックな蠱惑に感じられるのだ。